

目 次

凡例	3
----	---

序 章 『源氏物語』の物語空間を解読するために	5
-------------------------	---

一 はじめに	5
二 空間表現 (Space Expression) と物語空間 (Narrative space)	6
三 登場人物の〈移動〉 (Movement) とその機能	8
四 考察方法と目的	11

I 作中人物の移動と空間表現	21
----------------	----

第一章 若紫巻の北山考——若紫獲得への道筋と空間表現	23
一 はじめに	23
二 北山の醜化の意味	24
三 若紫獲得への道筋と空間表現——①かいま見の場面	28

四 若紫獲得への道筋と空間表現——②尼君との対面場面——	31
五 北山の変遷	38
六 おわりに	44
第二章 海づらと山里——須磨の空間表現とその機能——	47
一 はじめに	57
二 須磨における空間表現	58
三 須磨における山里の空間	64
四 須磨の山里の空間の背景	69
五 おわりに	72

第三章 異郷と境界と物語空間——須磨の暴風雨の場面の分析から——

一 はじめに	75
二 須磨の海の空間表現——『竹取物語』との類似——	77
三 須磨の海の空間表現——『浦島子伝』との類似——	83
四 三月一日の禊——源氏の海への移動と自覚——	87
五 須磨の空間の変換——明石の「世界」と繋がる空間——	91
六 おわりに	94
第四章 明石君と桂の院——重層的な物語空間の解説をめざして——	99
一 はじめに	99

II 建築内部の空間表現と物語世界

第一章 夕霧巻の小野の山荘——その空間読解——

一 はじめに	143
二 小野の山荘における登場人物の位置	144
三 「まめ人」夕霧の移動と暴力性	150

二 桂という場——伊勢と仲忠母と明石君——	100
三 桂の院の饗宴と明石君——禄を贈る意味——	104
四 桂の院の位置不定の作用	107
五 都への通路としての桂の院——明石君に附された「山里」の二重性——	112
六 おわりに	116
第五章 玉鬘物語における九条と椿市——〈市〉をめぐる説話との関わりから——	121
一 はじめに	121
二 玉鬘物語における「椿市」という空間	122
三 説話における〈市〉の空間	124
四 九条と椿市——「市女」と「市」——	128
五 玉鬘物語の独自の展開	131
六 おわりに	136

四 廂という場——僧侶という外界の視線——	154
五 廂という場——女房という内部の視線——	158
六 おわりに	163

第二章 紅梅卷の空間配置——紅梅大納言の家族空間と色好みの場——

一 はじめに	167
二 寢殿の規模——その数字が意味するもの——	168
三 物語本文における登場人物の居場所	172
四 紅梅大納言の位置と色好みの場	177
五 物語における紅梅大納言の邸宅の性格	182
六 おわりに	186

第三章 紅梅卷の贈答歌考——登場人物の居所との関わりから——

一 はじめに	189
二 「紅梅」をめぐる紅梅大納言と匂宮との認識のズレ	190
三 匂宮の返歌の二重性	196
四 二度目の紅梅大納言と匂宮との贈答の場面	198
五 おわりに	203

第四章 総角における隔ての空間表現——大君と薫の関係を照射するものとして——

一 はじめに	207
--------	-----

Ⅲ 住まいの文化と物語の空間表現

二 「障子の中より御袖をとらへて」の場面解説	209
三 二人の位置と隔ての具	212
四 「障子の閉鎖」と「袖をとる行為」——隔ての維持と破壊——	216
五 大君と薫の物語の展開	222
六 おわりに	226

第一章 『源氏物語』における障屏具——可変的な物語空間を作り出す装置として——

一 はじめに	233
二 平安時代の建築空間と障屏具	234
三 物語空間における障屏具の機能①	238
四 物語空間における障屏具の機能②	242
五 中の戸——紫上と女三宮の関係の形象化——	246
六 おわりに	250

第二章 『源氏物語』における戸締まり具——空間表現への視座から——

一 はじめに	253
二 『源氏物語』における戸締まりの表現	254

三	戸締まり具の名称と構造	260
四	中古物語における戸締まり具	266
五	「さす」という語の解釈	275
六	おわりに	277
	終章	281
	初出一覧	295
	あとがき	299

源氏物語の空間表現論

第一章 若紫卷の北山考

——若紫獲得への道筋と空間表現——

一 はじめに

『源氏物語』の若紫卷においては、初めての光源氏の洛外への旅が描かれている。そして、その旅とは、光源氏が一生の伴侶というべき紫の上と出会うという、大変重要な役割を物語の中において担っているものといえる。それは、今までの物語の舞台である都から離れた北山という新しい空間への旅なのであった。

ここで新しく登場してくる北山については、従来『伊勢物語』の初冠段の設定との近似や「なにがし寺」の準拠という観点から主に論じられてきた。また、『遊仙窟』からの影響を論じた丸山キヨ子氏^(注1)、『白氏文集』や廬山関係の詩文を典拠として指摘した新聞一美氏^(注2)、漢詩文と『遊仙窟』との関わりを指摘した田中隆昭氏^(注3)などにより、仙境的世界としての相貌が窺われることや、河添房江氏^(注4)により王権の予祝空間という意味付けがなされるなど、この空間の性格についての研究が活発に行われているのである。

それらの先学に学びつつも、本章では、従来あまり注目されてこなかった光源氏の移動の持つ意味性やその居場所に着目することで、新たな北山という空間が担う意味・表現について考察することとする。特に、光源氏の移動における空間の変化を考えることにより、それらと物語展開の様相との関わりについて論じていきたい。即